

ポストコロナの ゼミナールを考える

学習コミュニティ再創造に向けた『7つの問い』

ゼミナール研究会

本資料は、コメンテーターの1人として参加した西野毅朗（京都橘大学）がシンポジウム中にお見せしたスライドを一部修正したり追加したものになります。ご意見やお問い合わせがありましたら nishino-ta@tachibana-u.ac.jpまでお寄せください。

【問い6】

目的に応じた最適な学習スタイル
を選んでいるか？

専門ゼミの受講スタイル

●2020年度後期は、2020年9月時点における後期の授業実施方針について「**ゼミ等は対面**」と回答した大学は**62.3%**（文部科学省，2020）だったが、実際は…。

●2020,12～2021,1 実施 インターネット調査（西野，2021）
全国の人文・社会科学領域のゼミに在籍する3，4年次生学生1420名が回答

Q.2020年度後期のゼミの授業形態は？

対面のみ	20%
対面とオンラインの併用	39%
オンラインのみ	33%

文部科学省（2020）「大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査」

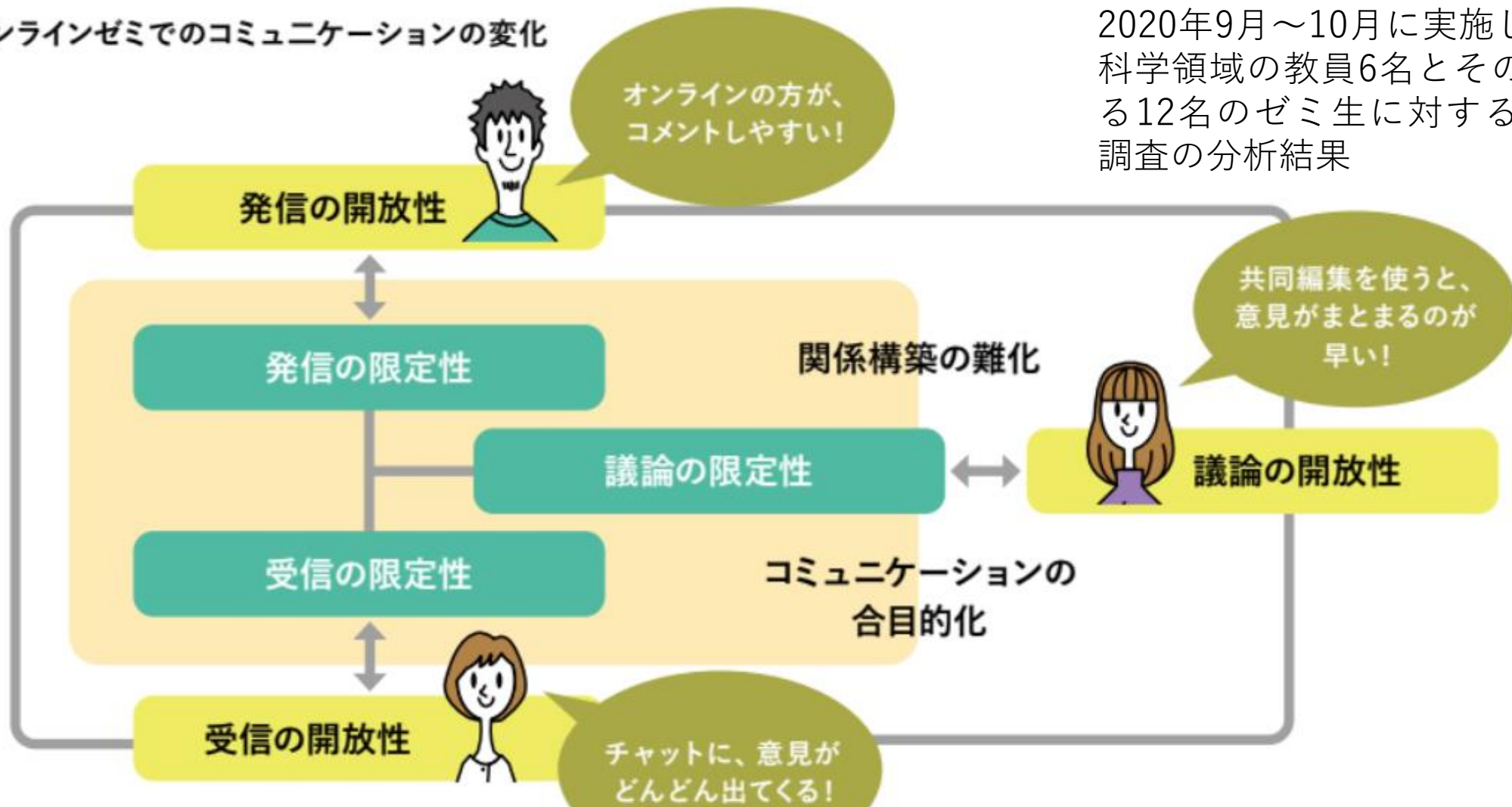
https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2021年5月8日アクセス）

西野毅朗（2021）「学生視点で捉える専門ゼミナール教育の遠隔化による影響」大学教育学会第43回大会発表要旨集録,pp.64-65

◆ オンラインゼミでのコミュニケーションの変化

2020年9月～10月に実施した人文・社会科学領域の教員6名とそのゼミに在籍する12名のゼミ生に対するインタビュー調査の分析結果

西野毅朗 (2021) 「COVID-19がゼミにもたらした変化ーオンラインゼミでコミュニケーションはどう変わったかー」第27回大学教育研究フォーラム発表論文集



【開放性のポイント】

- ・ 身体性の低いコミュニケーション（文字コミュニケーション、フラットなコミュニケーション）
- ・ ICTツールの活用（時間・場所を選ばないコミュニケーションが可能に）

【コミュニケーションの合目的化】

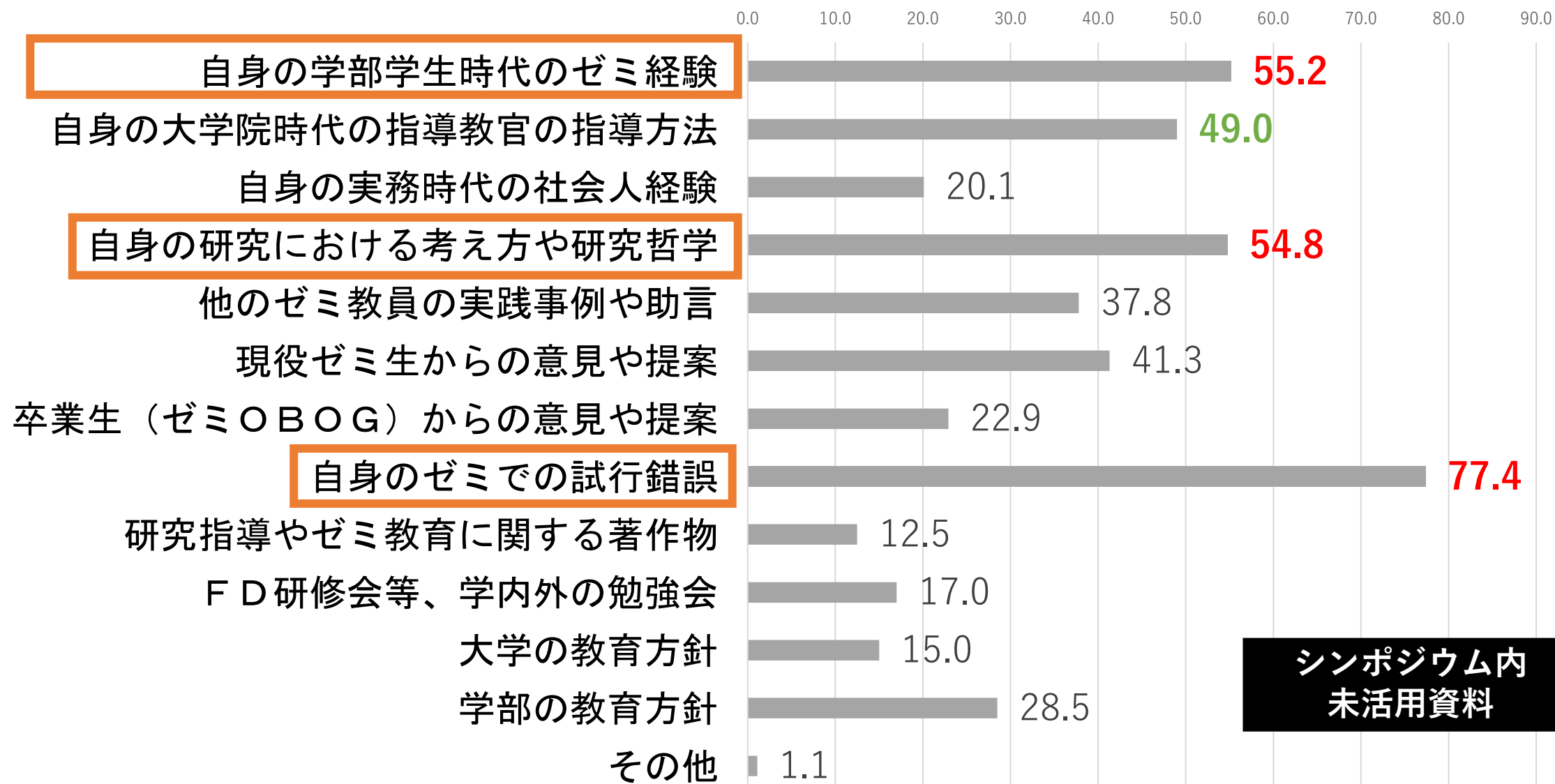
- ・ 効率的なコミュニケーションの促進／・ 創発的なコミュニケーションの鈍化

【問い7】

教員が相互に学び合う仕組みが
創造されているか？

全国調査の結果（全国の人文・社会科学領域の大学教員641名が回答）

問：専門ゼミのあり方に影響を与えているものは？



シンポジウム内
未活用資料

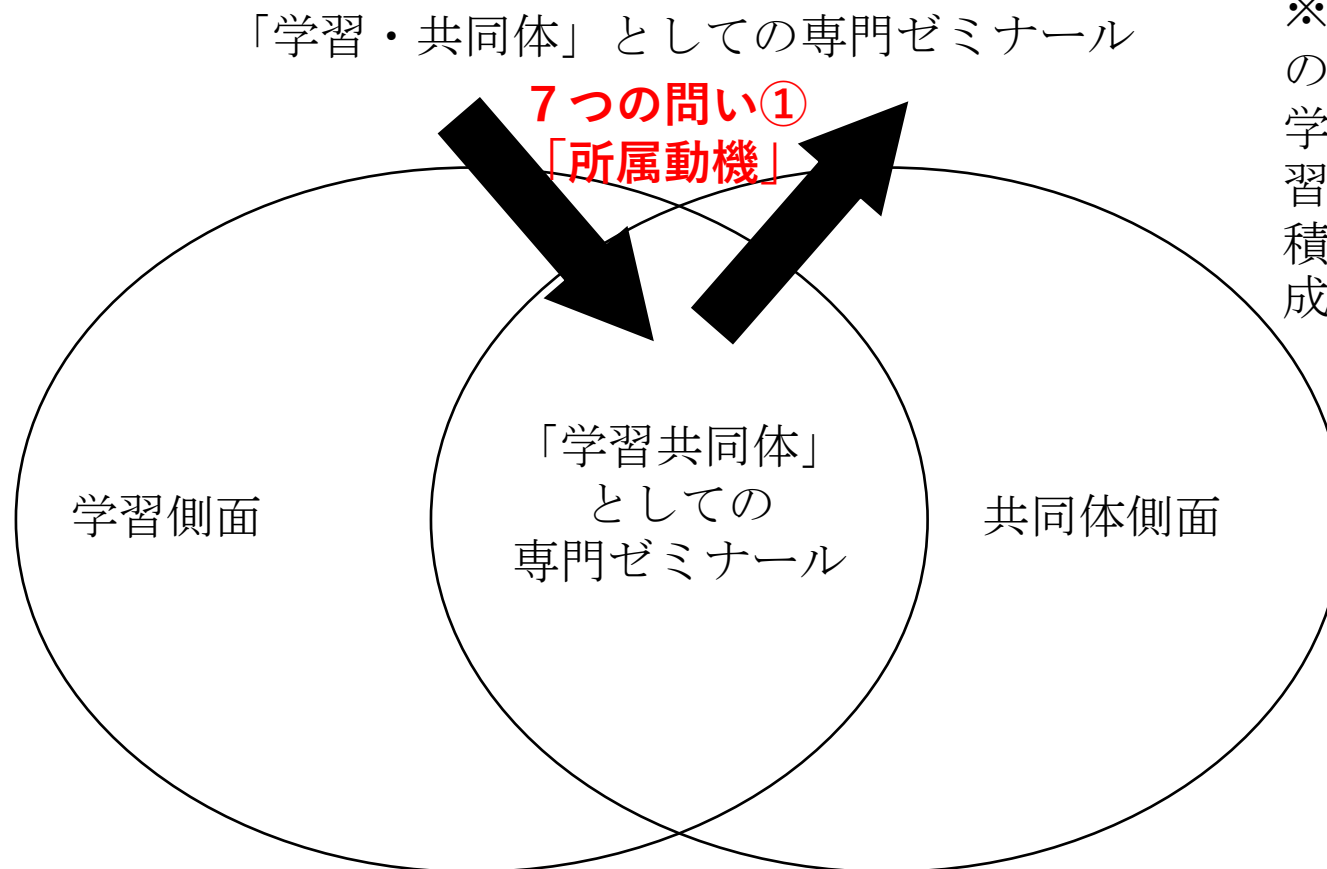
専門ゼミの理論モデルと 「7つの問い」の関係性

「学習・共同体」 ⇒ 「学習共同体」

※学習共同体＝対話と協同的探究によって、対象世界・自己・他者との批判的省察とそれらとの関係性が再構築される社会関係

※ 学習共同体は、杉原（2006）が、「学問／教育共同体」（フンボルト理念）「学びの共同体」（佐藤学ら）「実践共同体」（レイブ・ヴェンガーら）の共通点として導き出し、大学教育への応用可能性を模索した概念。米国においては「ラーニングコミュニティ」研究もなされているが、日本においては初年次教育の一環として注目されている。

※参与観察で導き出した「学習・共同体」「学習共同体」としての専門ゼミナールの理論モデル（西野，2022⇒出版予定）



※（量的研究成果）第1志望の学生の方が、そうでない学生に比べて専門ゼミの学習および共同体の両側面に積極的に関与し、より強い成長実感を得ている

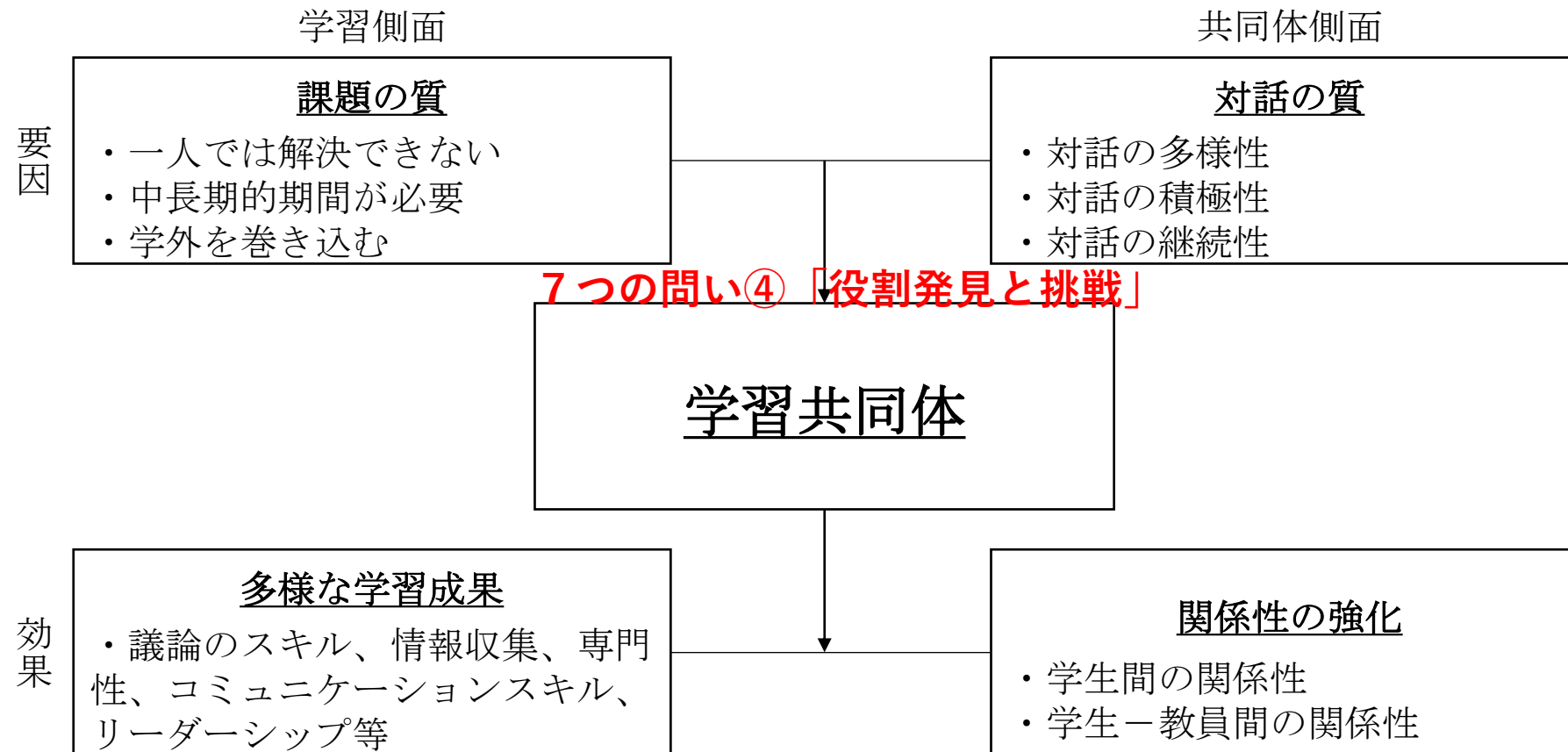
「学習共同体」の構築と7つの問いの関係

※参与観察で導き出した「学習共同体の成立要因と効果」の理論モデル（西野，2016）

7つの問い②「ストレッチゴール」

7つの問い③「関わる人の多様性」

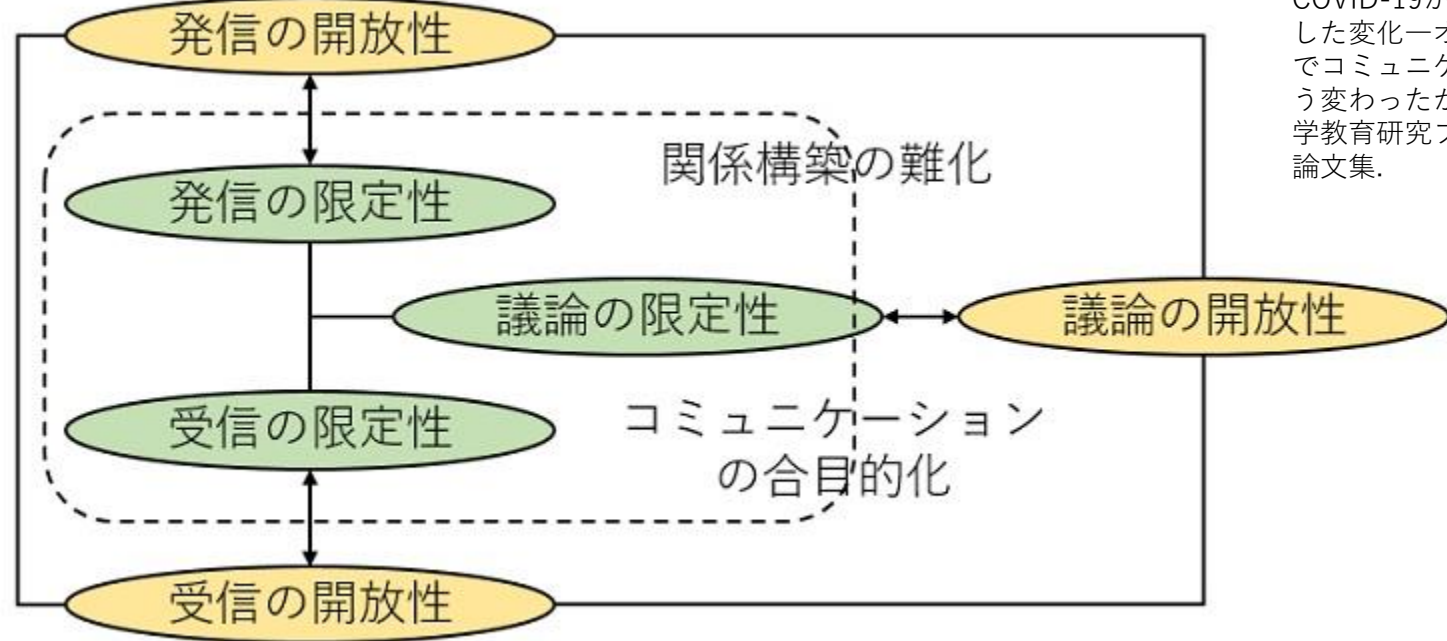
7つの問い⑤「何でも話せる安心・安全な場」



「オンラインゼミがコミュニケーションに与える影響」モデル（西野，2021）

西野毅朗（2021）「
COVID-19がゼミにもたら
した変化—オンラインゼミ
でコミュニケーションはど
う変わったか—」第27回大
学教育研究フォーラム発表
論文集.

7つの問い⑥
「目的に応じた学習スタイル」



【開放性のポイント】

- ・ 身体性の低いコミュニケーション（文字コミュニケーション、フラットなコミュニケーション）
- ・ ICTツールの活用（時間・場所を選ばないコミュニケーションが可能に）

【コミュニケーションの合目的化】

- ・ 効率的なコミュニケーションの促進
- ・ 創発的なコミュニケーションの鈍化

ラップアップ

3つのケースおよび
チャットでのやりとりを拝見して
(シンポジウム内では未活用資料)

「学習・共同体」 ⇒ 「学習共同体」

※学習共同体＝対話と協同的探究によって、対象世界・自己・他者との批判的省察とそれらとの関係性が再構築される社会関係

※ 学習共同体は、杉原（2006）が、「学問／教育共同体」（フンボルト理念）、「学びの共同体」（佐藤学ら）、「実践共同体」（レイブ・ヴェンガーら）の共通点として導き出し、大学教育への応用可能性を模索した概念。米国においては「ラーニングコミュニティ」研究もなされているが、日本においては初年次教育の一環として注目されている。

※以下は、参与観察で導き出した「学習・共同体」「学習共同体」としての専門ゼミナールの理論モデル（西野，2016）

・教育哲学⇒デザイン+生もの

「学習・共同体」としての専門ゼミナール

・基礎知識と技能
・専門知識と技能
⇒カリキュラムの有効活用
(個別科目の質も重要／復習も必要)
⇒教員や学外専門家のフォロー
※活用することに価値がある

学習側面

7つの問い①
「所属動機」

「学習共同体」
としての
専門ゼミナール

共同体側面

※（量的研究成果）第1志望の学生の方が、そうでない学生に比べて専門ゼミの学習および共同体の両側面に積極的に関与し、より強い成長実感を得ている

・オンラインでも雑談等の機会を創出
(緊急対応的)

・チームプロジェクト学習
・学習共同体の段階的な成長
(弱い学習共同体⇒強い学習共同体／コンペ⇒起業)

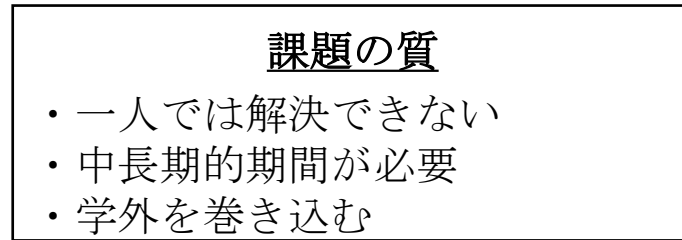
「学習共同体」の構築と7つの問いの関係

7つの問い②「ストレッチゴール」

- リアルな活用（追いつめられる、本気にならざるをえないような課題）

学習側面

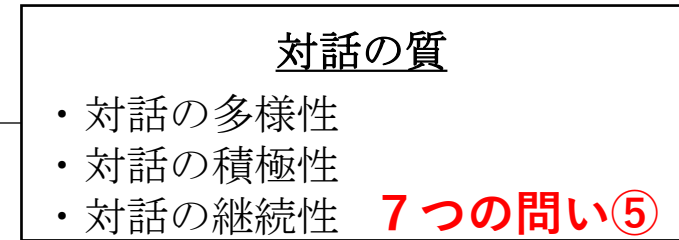
要因



7つの問い③「関わる人の多様性」

- 多様性の確保（ゼミ生同士、先輩・後輩、高校生、OBOG、企業人、NPO人、外部専門家）

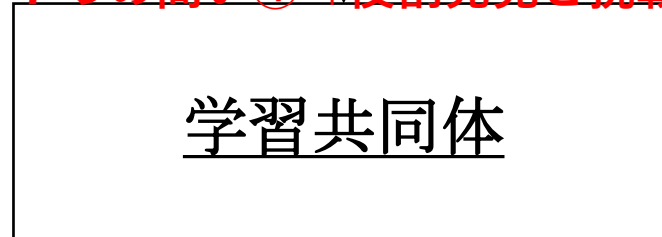
共同体側面



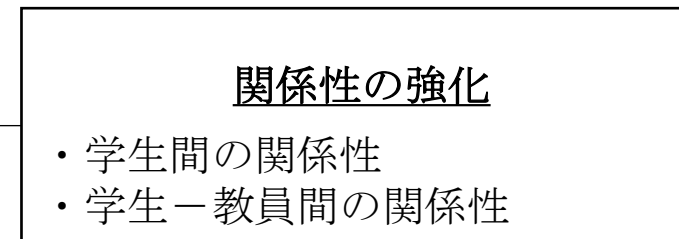
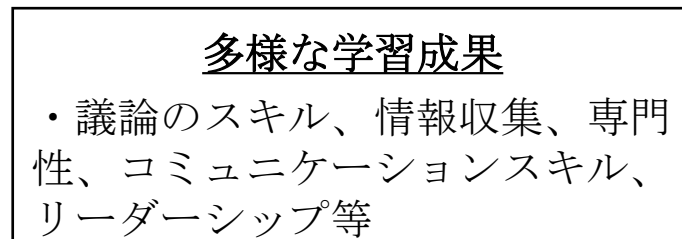
7つの問い④「役割発見と挑戦」

「何でも話せる安心・安全な場」

- 積極性の促進（ルールづくりと徹底、教員からの積極的な声掛けとフォロー）



効果



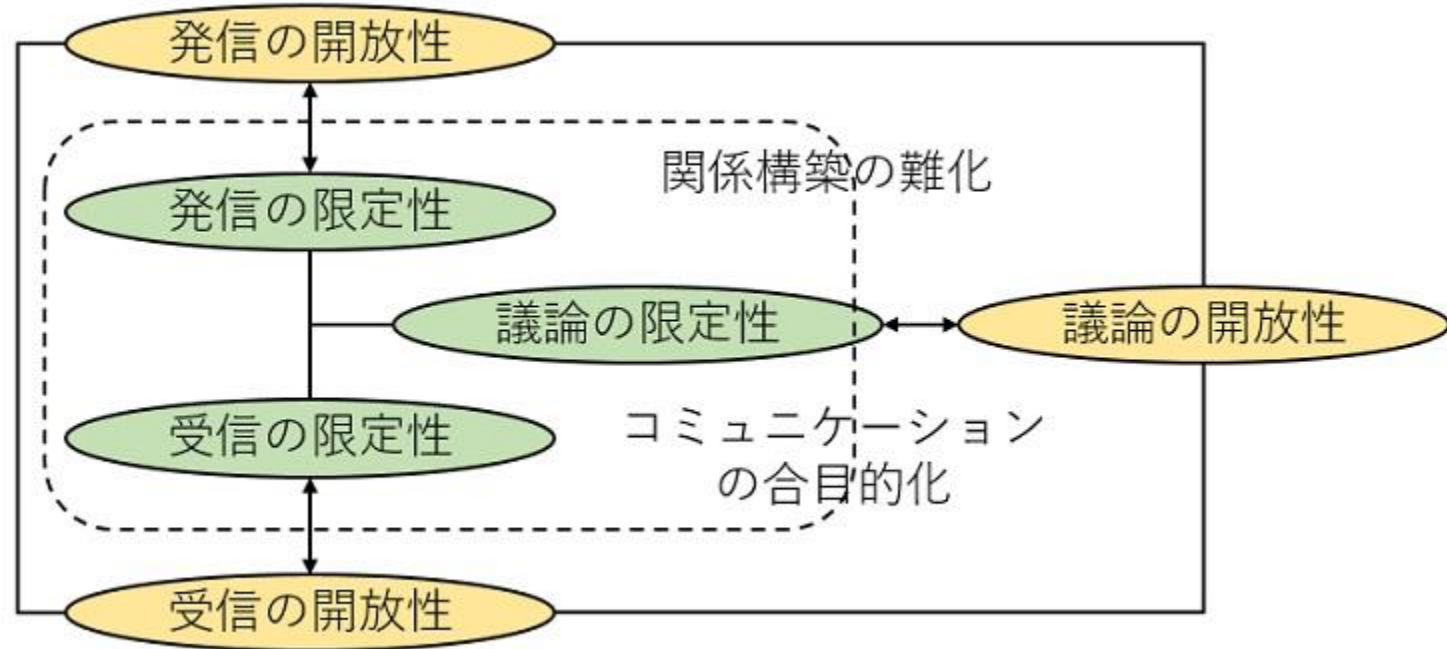
7つの問い⑦

「教員が相互に学びあう仕組み」

「オンラインゼミがコミュニケーションに与える影響」 (西野, 2021)

7つの問い⑥ 「目的に応じた学習スタイル」

- 対面による人間関係づくり
- 遠隔による目標達成の促進



【開放性のポイント】

- ・身体性の低いコミュニケーション (文字コミュニケーション、フラットなコミュニケーション)
- ・ICTツールの活用 (共同編集等対面以外の多様なコミュニケーションが可能に)

【コミュニケーションの合目的化】

- ・効率的なコミュニケーションの促進
- ・創発的なコミュニケーションの鈍化

< 7つの問いから考えるゼミの課題 >

• 質の高い学習成果／深い人間関係をいかに生み出すか

【7つの問い②】 いかなる課題を設定するか

【7つの問い①③⑤】 対話の積極性（衝突を生むほどの）をいかに引き出すか

【7つの問い④】 学生は本当に質の高い学修成果／深い人間関係を得られているか？

【7つの問い⑥】

(Withコロナ) オンラインでも可能にするにはどうすればよいか？

(Afterコロナ) オンラインを活用して、より成果を高められないか？

< 今回あまり言及できなかったこと >

• カリキュラムの中のゼミ、学生生活の中のゼミ

• ゼミとディプロマポリシーとの関係（卒論を含む）

⇒教員間連携 【7つの問い⑦】

• ゼミと正課外活動との関係（多忙・ 閑暇・ 就活）

⇒改めてゼミの意義とは何か？